

## ある標本

透明な瓶の中にホルマリン漬けにされ  
棚にずらりと陳列された  
それらの標本たちの含み笑いが  
不気味にも、また痛々しげにも  
この部屋を満たしている

そのうちのひとつを取り出し  
大きな机の上に置いてみると  
それは見るからに憐憫を感じないではいられぬ  
寂しげで、かつ憎々しげな笑いを固定していた

ある理念的な恭順を自らに強いるような  
それでいて  
感覚的な、おぼろげな虚栄に満ち満ちた  
また、  
幸福を得るための諦念に閉じ込められた  
かつ  
吊り下げられたモビールのようにふらふらとした  
そのような白々しい笑いを  
あらゆる自己を裏切り、背信し続ける笑いを・・・

研究者によって死へと跨らせられる正にその時に  
死への恐怖と痛苦を微塵も見せず  
なぜこのような笑いが湧き出ることが可能なのか  
研究者はどのようにしてこれを固定したのか  
私は、いつまでもそれに見入っていた

すると、ふと  
その瓶のあった場所に、  
小さな紙片が置いてあったのに気付いた

それは私の疑問を払拭してくれるものだった  
確かにそれは「居た」のだ、と

そこには小さな字で次のように  
丁寧に記されてあったのだ

**「超越的存在」**

**(2005.2.26)**